いしかり博物誌 114

石狩市の大地震、津波記録

東日本大震災以来、「石狩市では過去、大地震などがなかったのか」という質問が多く寄せられています。そこで今回は石狩市で起きた大地震、津波について書いてみます。

皆さんは「石狩地震」という名を聞いたことがありますか。これは天保5（1834）年、今から180年近く前、石狩川河口付近を震源域として起きた市内最大の地震のことです。

地震は冬、旧暦1月1日に起き、マグニチュード6.4、最大震度6と推定されています。地震の原因や再来期（再び起こる時期）は分かっていません。記録はごく少ないのですが、江戸の人の日記や松前藩に残る文書などから当時の状況がうかがえます。

江戸の人の日記（『天保雑記』）に「天保5年1月1日石狩国地強く震い、屋舎破倒し、地裂け、泥沙噴出す、沿岸の地には津波打寄せたり、この日江戸も少しく震へり」と書かれています。「地裂け、泥沙噴出す」とありますから、「地割れ」や「液状化」が起きたのでしょう。実際、市内や札幌市の低湿地では、この地震によると考えられる「地割れ」や「液状化」の跡が見つかっています。さらに「沿岸の地には津波が打寄せたり」と書かれていますから、津波も発生したのでしょう。この地震による被害は、人的にはなかったものの、80軒以上の建物が全半壊したとされています。

『松前町年寄詰所日記并番日記』という文書では、2月1日にも大地震が起こり、石狩市本町地区にいた和人、アイヌ人は今の小樽や厚田に避難したと書かれ、松前藩では冬にもかかわらず調査隊を出したようです。

また『北海道蝦夷語地名解』によると、浜益区の尻苗の近くに「シリトイエ」というアイヌ語地名があり、これは「山が崩壊した」という意味だとしています。弘化3（1846）年の松浦武四郎の記録にも「（シリナエ）此辺近年大地震有りて崩れしとて、其跡に樹木草茅一株もなし」と書かれており、石狩地震のつめ跡が地名となって残ったものと考えられます。このほかに寛政4（1792）年の積丹沖地震と文久3（1863）年の天塩沿岸の地震による津波があったようですが、被害は小さかったようです。

（石橋孝夫）

▲かつて石狩川河口付近を震源域とする地震があったことも。

【参考文献】

石狩市（2003年）『石狩市年表』
石狩町（1972年）『石狩町誌』上巻
笠原稔・宮崎克宣（1998年）「札幌市とその周辺の歴史地震と最近の地震活動」北海道大学地球物理学研究報告61
永田方正（1890年）『初版　北海道蝦夷語地名解』1984年復刻版
松前町（1973年）「松前町年寄詰所日記并番日記」松前町史資料編2
松浦武四郎著、翻刻・編秋葉實（1999年）『校訂蝦夷日誌二編』

■文化財課・いしかり砂丘の風資料館
☎62-3711 ✉bunkazaih@city.ishikari.hokkaido.jp

ERIS「いしかり博物誌」は、えりすいしかりネットテレビ（http://www.i-eris.tv/）でもご覧いただけます。